

2001年度

駿台史学会50周年記念大会

研究発表・シンポジウム要旨

2001年11月17日・18日

駿台史学会

於 明治大学リバティタワー

プ ロ グ ラ ム

11月17日（土）

自 由 論 題	10：00～12：30	リバティタワー 9階	1096教室
総 会	14：00～15：00	リバティタワー 9階	1096教室
50周年記念講演会	＜駿台史学会の過去・現在・未来＞ 15：00～17：30	リバティタワー 9階	1096教室
大 懇 親 会	18：00～19：30	大学会館 8階	大会議室

11月18日（日） 50周年記念シンポジウム

シンポジウム	＜村落史研究－歴史の基層－＞ 10：00～16：40	リバティタワー 9階	1096教室
シンポジウム	＜出土文字資料研究の現在＞ 10：00～16：00	リバティタワー 1階	1011教室
シンポジウム	＜黒耀石と人類史＞ 13：00～16：00	リバティタワー 1階	1012教室

研 究 発 表

自 由 論 題

根室半島におけるアースハンモックの形成プロセス	天井澤 暁裕	2
満洲事変と外務省 「満洲国」正当化の論理	竹 内 桂	4
唐代の国家祭祀と酒 ―廟享と裸礼(かんれい)と中心に―	江 川 式 部	5
インテリゲンツィアとナショナリズム―20世紀初頭ロシアの論壇から―	古 閑 義 和	6
韓国旧石器時代研究の動向	金 正 培	8

50周年記念シンポジウム

シンポジウム<村落史研究―歴史の基層―>

村落史シンポジウムの開催にあたって	木 村 礎	12
日本中世村落の景観と生活―その研究史的意味と方法論をめぐって―	原 田 信 男	12
近世絵図と地域景観	橋 本 直 子	14
朝鮮における村落研究	寺内 威太郎	16
『中国農村慣行調査』と再調査から見た中国華北農村社会について	内 山 雅 生	17
インドの農村と農村研究	古 賀 正 則	19
トルコの村落―遊牧民から農民へ―	永 田 雄 三	20
パネルディスカッション「歴史認識における村」	パネラー：報告者／司会：高島緑雄・門前博之	

シンポジウム<出土文字資料研究の現在>

データベース化される墨書土器―シンポジウムへの問題提起―	吉 村 武 彦	22
墨書土器の出現と展開―飛鳥・藤原地域の墨書土器を中心に―	松 村 恵 司	22
律令官衙と墨書土器―平城・長岡京から地方へ―	清 水 み き	23
墨書土器研究の新視点―東国を中心に―	荒 井 秀 規	24
パネルディスカッション「墨書土器研究」	パネラー：報告者／司会・高島英之・吉村武彦	

シンポジウム<黒耀石と人類史>

黒耀石とは何か	杉 原 重 夫	28
黒耀石と考古学	安 蒜 政 雄	28
黒耀石原産地遺跡群の保存と活用	大 竹 幸 恵	29
パネルディスカッション「黒耀石研究の未来」		

パネラー：杉原重夫・安蒜政雄・大竹幸恵・島田和高・阿部芳郎・石川日出志／司会：矢島國雄

根室半島におけるアースハンモックの形成プロセス

天井澤 暁裕

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・地理学)

はじめに

アースハンモックは凍結－融解サイクルによる地形形成営力が卓越する周氷河環境下で形成される構造土の一種で、直径約1 m、高さ20～50 cm程度の半球状の形態をなす微地形である。アースハンモックはマット状の密な植生に覆われており、その内部はシルト・粘土質を多く含んだ細粒な土壌となっている。アースハンモックの分布域は構造土のなかでも最も広く、極北の永久凍土帯から年平均気温6℃の季節凍土帯にわたっている。日本での分布は、北海道の北部・東部、本州・九州の一部の山岳地域に限られている。アースハンモックの形成環境には、マット状の密な植生、過湿な水分条件、火山灰や氷河成堆積物起源などの細粒な土壌が必要不可欠である。アースハンモックの成因については、これまでさまざまな説が提唱されてきた。しかし、凍結－融解期を通じた観察・実験データにもとづいた議論がほとんどなされておらず、その成因は依然として解明されていない。そこで、演者がアースハンモックの分布を確認した北海道東部、根室半島において、アースハンモックの分布タイプ・形態が異なる大型密集地、密集地、散在地、一面ミヤコザサが覆うササ地（以下ササ地とする）、アースハンモックが分布していない平坦地（以下、平坦地とする）を選定し、1998-2001年にかけて気温・地温観測、凍上-沈下量計測、水平変位量計測、土層断面観察とともに夏季の観察を実施した結果、以下の知見を得た。

アースハンモックの分布を規定する要因

根室半島のアースハンモックは、主に地下水位の高い（約30～70 cm）牧草地に分布しているが、ササ地では地表から1.5 m深以内に地下水位が認められない。また、平坦地の地下水位も1.5 m深以内に存在していない。さらにアースハンモック分布地では埋没風化火山灰層が粘土化しているが、平坦地ではこの土層の粘土化は認められない。

各調査地の土層で粒度分析を実施した結果、アースハンモックは周辺の平坦面（以下平坦面とする）と比較してより細粒な粒度組成となる傾向がみられる。また、散在地のアースハンモックはシルト質を多く含み、最も凍上しやすい粒度組成である。

凍結進行期

土壌凍結は11月下旬から急速に進行し、凍結進行の初期ではコンクリート状凍結が卓越する。コンクリート状凍結層はアースハンモックで20～40 cmの厚さに達するが、平坦面では5～10 cm程度である。水平変位量計測の結果、アースハンモックの頂部と平坦面の間隔はこの時期に数mm広がる傾向があり、大型密集地の平坦面では

深さ約 10cm の凍結割れ目が形成されていた。また、大型密集地の平坦面では冠水の凍結とともに、塔状あるいはハンモック状の析出氷が地表面に形成されていた。

アースハンモックの成長（約 2cm）が確認された散在地では、コンクリート状凍結層直下にアイスレンズおよび霜柱状氷の析出が卓越するため凍上量も最大となる。霜柱状氷は平坦面下にもみられるが、アースハンモック直下においてより厚く析出している。一方、アースハンモックの成長が認められなかった大型密集地、密集地、ササ地では霜柱状氷が析出しておらず、アイスレンズの析出も微量であった。さらに、凍上量が最も小さかったササ地ではアイスレンズの析出は確認できなかった。

融解期

アースハンモックでは含水量が少なく融解しにくいコンクリート状凍結層が厚いため、平坦面と比較して凍土の融解が長期化し、さらに再凍結も起こる。この不等融解にともなって、各調査地の水平変位量は融解期に最大となる。また、地下水位は凍土の融解によって年間を通じて最も高くなる。凍土の完全融解後、散在地のアースハンモックでは霜柱状氷が形成されていたと考えられるアースハンモック基部において、平坦面に比べ密に発達した根系マットによって維持された隙間が多数確認された。さらに夏季に土層断面上で土質硬度を測定した結果、散在地のアースハンモックでは、中央～基部にかけて低い値となり、平坦面に比べて膨軟であった。

アースハンモックの形成プロセス

本調査地域でのアースハンモックの形成には、粘土層に維持された高い地下水位が必要不可欠であり、高い地下水位によって凍上に必要な水分が供給されると考えられる。一方、降雨後に冠水するなど極端に地下水位が高く、吹き溜まりによる積雪量も多い大型密集地では、本来凍上に用いられる水分が地表面に析出してしまいうことと、積雪による断熱効果によってアースハンモックの凍上量は小さくなる。地下水位による水分条件と凍上しやすい粒度組成の二つの条件が重なる散在地は、霜柱状氷やアイスレンズが析出することによって凍上量も大きくなる。

以上の諸点から、アースハンモックの形成は凍結割れ目の開口に起因しており、凍結期にアイスレンズや霜柱状氷の析出により大きく凍上する。融解期には平坦面よりも厚いコンクリート状凍結層によって融解が長期化する。密に発達した根茎は、融解後も凍上による持ち上がりがある程度維持するために沈下が不完全となる。このような凍上と不完全沈下の累積によって割れ目に囲まれた中央部が盛り上がり、アースハンモックは成長するものと考えられる。現在も成長が観測される散在地のアースハンモック中央～基部にかけての土質硬度の低下はこの考えを裏付けるものであろう。

また、アースハンモックは平坦面が完全に融解し、地下水位が最も高く物質移動に適した融解期に最凍結する。これにより、凍結面で起こる細粒物質の引き寄せによって、アースハンモックは平坦面よりも細粒な粒度

組成になるものと推測され、この繰り返しによってより凍上しやすい土質になるものと考えられる。

満洲事変と外務省「満洲国」正当化の論理

竹内 桂

(明治大学文学部助手・日本史)

1931年9月18日、関東軍は謀略により満洲事変を引き起こし、満洲への侵略を開始した。張学良の不抵抗主義などの要因もあり、関東軍の武力侵攻は満洲各地に及び、32年3月には「満洲国」が樹立されるに至った。事変当初、事変の不拡大を唱えていた日本の外務省は、事態が進行するに連れて次第にそのスタンスを変化させ、既成事実を追認していった。同時に外務省の満洲事変解決策も、親日政権樹立（南満洲地域）から「満洲国」による満洲支配へと変化していった。この変化に伴い、外務省は東アジア・太平洋地域の国際秩序として成立していたワシントン体制への対応を迫られることになった。具体的にいえば、この体制を法的側面で支えていた、連盟規約、九ヶ国条約、不戦条約への対応である。実際には日本軍の行動はこれらの条約に違反するものであったにもかかわらず、日本は違反しないと主張した。この主張に際して日本が必要としたことは、満洲事変勃発以来、日本軍がとった行動の正当化と「満洲国」成立の正当化である。これらの正当化がなされてはじめて、日本は「満洲国」の承認が可能となるのである。本報告では第一に、この正当化にあたって外務省がどのような論理を展開したのかを報告する。

「満洲国」正当化という問題とともに重要なことは、「満洲国」承認の方法である。傀儡国家とはいえ「満洲国」という国家を承認する以上、国際法に関わる問題であり、外務省でも検討がなされた後に承認が与えられている。本報告では第二に、日本が「満洲国」を承認する際にどのような検討がなされ、どのような承認方法がとられるに至ったのか、という点を考察する。

本報告では第三に、上述の論理をめぐる日本と国際連盟との相克を明らかにする。10月1日に発表された「リットン報告書」で自らの主張をほぼ全面的に否定された日本は、その反駁書として「国際連盟支那調査委員会報告書ニ対スル帝国政府意見書」を作成し、自らの論理を再度主張する。国際連盟での議論において両者の論理がどのように展開され、どのような帰結となったのかを明らかにしたい。

唐代の国家祭祀と酒

一廟享と裸礼(かんれい)を中心に一

江川 式部

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・東洋史)

唐朝の数ある祭祀儀礼のほとんどには、酒類を用いた儀式(酒礼)が組み込まれている。そしてその祭祀儀礼の中核をなす。たとえば皇帝が天をまつる祭祀の場合、まず皇帝が天帝に酒を献じ、次に天帝から賜ったものとしての酒(福酒)を受けて、礼が完了する。朝会など皇帝と群臣との儀礼では、皇帝は群臣から差し出された酒を受け、次に行酒、つまり答礼として群臣に酒を賜わなくてはならない。酒は儀式の中で、媒体としての重要な役割を担うのである。

中国史における礼制ないし礼典は、それぞれの時代の秩序観念を反映したものと考えられる。そこに著された酒礼のあり方からは、こうした秩序観念の表出が看取できる。

祭祀の場における酒類の配置については、経書に記される儒教祭祀では、五齊三酒という8種類の酒類や鬱鬯^{うっちよう}という香酒、明水・玄酒といった浄水などを神座前に陳べ供える。こうした祭祀用の酒類や浄水は、唐代においてはすでにその製造方法がよくわかっていなかった。にもかかわらず、唐礼のなかに組み込まれ、配置の細則も決められている。それを集約すると、五齊三酒は、大祀・中祀・小祀という当時の国家祭祀の区分にしたがって使い分けがなされ、また玄酒・明水の二種類の浄水は、皇帝が執り行う祭祀であるか否かという点で使い分けがなされていることが判明する。

このように祭祀儀礼の場における酒類や浄水の使い分けから、祭祀の格や皇帝祭祀の特殊性が明らかになるとすると、つぎに問題となるのは、こうした酒類や浄水を用いた儀式、酒礼の内容である。本報告では、唐代の酒礼の一つである裸礼という儀式をとりあげる。

裸礼^{かんれい}とは、鬱鬯という酒を用いて行う儀式である。『周礼』や『儀礼』『礼記』等に記される古代の裸礼には、大きく分けて二つの種類があった。群臣が集る朝会で王が賓(群臣)に対して行う饗礼の裸と、廟で降神のために行う宗廟の裸とである。しかし唐代の祭祀儀礼においては、前者の饗礼の裸は朝会儀礼の儀式次第には採用されず、後者の宗廟の裸礼のみが太廟での祭祀(廟享)儀礼に組み込まれた。

祭祀当日の朝、まず鬱鬯を上座前の地面に注いで裸礼を行い、神霊の依り来ることを祈る。人は死後、魂と魄とにわかれ、魂は天に、魄は地に残ると考えられていた。このため廟に祭られた死者の、魂を音楽によって、魄を裸によって呼び戻し、その後で、正式に各神前に酒類をささげる三献の儀式を行うのである。ただし同じ廟でも、品官の家廟での廟享儀には裸礼はなく、唐代の裸礼は、太廟・太子廟においてのみ行われる儀式となっている。こうした皇帝とそれ以外の者との祭祀儀礼の差別化は、鬱鬯の使用にもみとれる。

鬱鬯は、唐代では鬯酒(秬黍^{くろきび}の酒)に鬱金の煮汁を和えたものと理解されている。『開元礼』によると、裸礼

のほか、犠牲の肝を洗ったり、神前に供えたりすることに用いるとある。だが現実には、五斉三酒や明水などと同様に、開元年間に至ってもその製造方法はよくわかっておらず、実際には代替品が使用されていた可能性が高い。そして鬱鬯を廟享に使用できる身分は、『儀礼』士昏礼に付された唐・賈公彦疏には「若天子諸侯祭祀、得鬱鬯与五斉三酒並用。」とあるが、『開元礼』では太廟ないし太子廟での廟享に限られている。以上をまとめるとつぎのようになる。

- 1、裸礼は、唐礼では皇帝一族の廟である太廟と太子廟での廟享に限定された。
- 2、鬱鬯は経書の解釈と異り、太廟・太子廟の廟享の場合にしか使用されない。
- 3、鬱鬯は唐中期に至っても製造方法が分かっていなかった。このことから、実用するためというよりはむしろ、儀礼の中に組み込むことに意味があったと考えられる。

祭祀儀礼の場における酒礼のありかたは、必ずしも『周礼』『儀礼』『礼記』のにある古儀に則ったものではなく、唐が理想とする秩序構造に沿うように、意識的にあるいは効果的に組み込んだものと考えられる。そこには皇帝祭祀を至上とする、当時の秩序観念がうかがえるのである。

漢代以来の皇帝祭祀の特殊性ないし重要性については、皇帝権の確立の問題として従来すでに指摘されてきたところである。強化された皇帝の地位が社会から認知されるためには、その地位の実質的な権力だけでなく、その地位を保証する制度の完成が必要とみるのが合理的であろう。その意味において、皇帝の儀礼とそれ以外の者たちによる儀礼の間に決定的な差異が生まれた唐代こそ、中国における皇帝権力の強化の歴史の完成期といえるのではないか。

インテリゲンツィアとナショナリズム

—20 世紀初頭ロシアの論壇から—

古 閑 義 和

(明治大学文学部教務助手補・西洋史)

1905 年から 1906 年にかけての第 1 次革命の高揚と衰退を経て、20 世紀初頭のロシアには、それまでのツァーリ専制に代わる、新しい政治的・社会的状況が生じつつあった。きわめて限定的な機能しか与えられていなかったとはいえ、ともかくも議会（ドゥーマ）が開設されたことは、大衆の政治参加への機会と関心を広げた。そして 19 世紀末から進行しつつあった都市化や工業化、あるいは識字率の向上といった諸現象もあって、この時期、ジャーナリズムを舞台として、知識人（インテリゲンツィア）たちの言論活動も活況を呈した。そうしたインテリゲンツィアの一人が、本報告で取り上げるピョートル・ストルーヴェ（1870～1944 年）である。

ストルーヴェは 1898 年にロシア社会民主労働党（後のソ連共産党）の結党宣言を起草したことで知られる

ように、もともとはマルクス主義者であった。1900 年頃からその政治的・思想的立場を自由主義・立憲主義へと移し、第一次革命後、「偉大なるロシア」(1908 年)をはじめとする数々の論文を通して、ナショナリズムを主張した。しかし当時のロシア・インテリゲンツィアの多くは、これに対して拒否反応を示した。彼の議論は、大きな波紋と激しい議論を巻き起こすに至った。本報告では、彼のナショナリズム論を、当時のインテリゲンツィアの間で交わされた論争の流れを追いつつ、検討して行きたい。

彼のナショナリズム論の核をなす概念としてまず挙げられるのは、государственность である。通常「国家機構」「国家体制」と訳されるこの言葉を、ストルーヴェは、国家機構や国家体制といった制度それ自体と、そこから発せられる一つの抽象的なイメージという、両方の意味で用いている。彼は、ロシアの再生のためには、この「国家性」が一人一人の個人の領域上で生々しく実感される必要があると考えた。そして、個人が国家へと一方的に取り込まれるのではない、個人の実感に基づいた個人主義的なナショナリズムの構築を図った。

ところで、ストルーヴェによれば、こうした「国家性」が個人において生々しく実感されるためには、国家性の中に「神秘性 мистичность」がなければならない。なぜならこの神秘性こそは、国家に対する個人の自発的な服従を生み出し、時として国家のために命すら投げ出すことを可能にする要因だからである。そして国家性にこの神秘性を与えるのは「民族性 национальность」である。彼は「民族」を特定のエスニシティの単位としては捉えない。彼にとっての「民族 нация」とは、それに加わり、それになりうるもの、即ち近代以降の「国民 nation」の概念に近い。彼が構想する「国家」とは、いわゆる近代以降の「国民国家 nation-state」である。彼は国家の神秘性は「国民」あるいは「国民国家」の創出によって保証されると考えた。

このような「国家」や「国民」の創出にあたって、ストルーヴェはインテリゲンツィアに自己改革を要求する。彼によればロシア・インテリゲンツィアの特徴をなすのは、その「反国家性」と「無宗教性」である。インテリゲンツィアはこの二つの性格を克服し、「国家性」の担い手とならねばならない。教育程度や文化程度を考慮すれば、インテリゲンツィアこそが、ロシアにおいて「国民」に最も近い場所にいる社会層だからである。この際、彼がモデルとして念頭に置いている「国民」とは、当時のドイツおよび英国の「国民」である。

だが、こうしたストルーヴェの議論には、様々な問題点が指摘されうる。例えば彼は、「民族」をエスニシティから切り離しつつも、ロシア「民族」のヘゲモニーをエスニックな意味でのロシア人に与え、他の民族(とりわけユダヤ人やウクライナ人)のロシア文化への同化を主張した。また、ストルーヴェが国家性の担い手としてのインテリゲンツィアの自己改革を要求する際、そこにはインテリゲンツィアの民衆に対する指導性が明確に認識されており、生きた実際の民衆 народ に対する視点は弱かった。そして何よりも重要なことは、前述のように、彼のナショナリズム論が、当時のロシア・インテリゲンツィアの多くに、受け入れられなかったということである。

ストルーヴェのナショナリズム論の大きな特色は、それが当時の既存の政治・経済体制を全面肯定してはい

ないことである。それはあくまでも自由主義の立場から提出された、立憲主義に基礎をおくナショナリズムである。曲がりなりにも立憲的な政治体制へと近づきつつあったとも言える当時のロシアにおいて、彼の「立憲的」ナショナリズム論はどのような意味を持ったのか、そして議論が受け入れられなかったという事実は何を意味するのか。本報告では、こうした諸点についても、考察を試みる。

韓国旧石器時代研究の動向

金正培

(明治大学大学院文学研究科博士後期課程・考古学)

1. 時期区分

韓国における旧石器時代の研究は1960年代から本格的に始まる。

経済成長と共に学問的に成長し始めた60年代は幾つかの学史的に重要な遺跡が調査されるが、まだ基本的なデータが少ないため研究には深く踏み込めなかった。発掘調査や採集による資料はいろいろな試行錯誤の中、数少ない研究者達により年代の割り当てが行われ、形態的な分類が試みられた。そのような過去を持った韓国の旧石器考古学は、今日ではアジアの旧石器文化研究において貴重な資料を常に提供するに至った。

韓国の旧石器時代はフランスの時期区分を取り入れ大きく3つの時期に分けられている。主に礫器のAcheulianのhand axeやchopperそして、chopping-toolが用いられた前期(7万年以前)・Levallois技法による剥片を利用した削器が主体の中期(7万年以降～3万5千年)・石刃技法と彫器そして、骨角器が主体の後期(3万5千年～1万数千年)に分けられる(金元龍 1984)。しかしながら、前期旧石器時代や中期旧石器時代の区分にはいまだいろいろな問題が解決されてないため、実際の時期区分はまだその境が曖昧である。

2. 編年の研究

韓国の旧石器時代研究は日本と比べてテフラの堆積がほとんどないため、出土遺物の年代は石器の形態的な特色と有機物あるいは炭化物からの測定年代による編年が多い。テフラがしっかり確認できると層位学を利用して遺物の出土層位からその上下関係を想定することができる。しかし、残念ながら韓国の場合、日本のAT火山灰のような広域火山灰がないため遺物の上下関係や年代を知るのにテフラは使えないのである。ではどのような方法で出土遺物の年代や編年を定めるのか。

韓国には良好なテフラはないがそれに似たような自然層を確認する作業が1980年代から行われ、気候と関連する土壌内の運動に関係が深いと思われる土壌楔跡(soil wedge)が韓国の古土壌から確認することができる。

この土壌楔跡は地域によっては2つ以上みられるが主な soil wedge は2つみられ、その wedge の中の炭化物や有機物の分析により上部 soil wedge が $24,110 \pm 4930 \sim 12,050 \pm 3,140\text{BP}$ そして、下部 soil wedge が $73,000 \pm 2,590 \sim 58,960 \pm 5,560\text{BP}$ の年代 (李東瑛^{イ・ドンゴン}1994) が出ているので、これをもって編年的な位置関係を探っている。

また、石器の形態的な特徴から、素材の形を大きく取り入れた簡単な製作過程により作られた礫器類 (主に hand axe, chopper, chopping-tool 類) →剥片を用いた Levallois 技法によるポイントや削器類→小型の石刃技法によるポイントや細石器と彫器類、という編年の組み方をしている。しかし、ここ数年の発掘成果から後期旧石器時代の最後の段階でも、単純で古式形態をもつ礫器群が見られることから、石器の形態的な特徴による単純な編年図式を考える研究者は少なくなっている。このような特殊とも言える現象は日本の事情とも異なり、西と北の大陸からの文化の輸入あるいは伝播がもたらした結果ともいえる。

このような異質的な石器群の存在とは別に日本列島でも確認できる石器がある。それは九州を中心に多く出土し、九州以外の地域では少ないが、ほぼ日本全国にその分布範囲が認められる剥片尖頭器 (tanged-point) と、大陸やアジアそして北米にもその分布が確認できる細石器である。この両者は後期旧石器時代の韓国と日本列島を結ぶ線としてその重要性が注目されている。

3. 石材の研究

韓国で多く見られる石材の第一は石英である。石器類の中で礫器のほとんどは石英脈岩 (vein-quartz) で作られている。一般に石英は非常に硬度が高く加工が難しくみえる。実際加工するには現在の人類の能力からはかなり難しいのである。

では、このような石材を好んで用いた理由は何か。それには強い技術的伝統あるいは習慣による形態に関する拘りが考えられる。例をあげると、韓国の北部そして、中部地域に多く存在する旧石器時代の遺跡からは多くの hand-axe が出土するが、その石材はほとんど石英脈岩である。そして、その形態的な特徴は技術的な差は若干あるものの石材運用の仕方はほぼ同一である。円礫の側端の手で握る部分には円礫の自然面 (原礫面) を残しながら外側から内側に向かって直接打撃により刃部を biface 状に加工を施す。このような作り方はいわゆる Acheulian の hand axe と類似する形状になる。

また、削器類にも石英脈岩は用いられているが、その素材の用い方は hand axe とは違う。この種類の石器は原礫面を残さない、すなわち礫の内側の自然劣化を受けてない良質な部分、あるいは純度が高い緻密な石材を用いて加工するのである。これらの石英脈岩は遺跡周辺に流れる川の辺で拾えるもので石材補給は特別な石材戦略を立てなくても場当たりのシステムで手に入れることができる。このようなシステムはいわゆる前期から後期旧石器時代まで大きく変わらないまま存続する。

しかし、後期旧石器時代のもっと複雑な石器製作になるとこのような石材補給システムは機能しなくなり、

ある産地を中心としたシステムを強いられる。その代表的な例が垂柳介遺跡である。垂楊介遺跡では珪質頁岩がメインの石材だが黒曜石製石器も出土している。その黒曜石の産地に関する研究も行われているが、韓国内には現在正確な産地はまだ調査中である。しかし幾つかの可能性を考えることができる。その考えられる産地の中に白頭山と休戦線付近の江原道がある。1984 年東村武信による鰲山里遺跡出土黒曜石の蛍光 X 線分析によると鰲山里遺跡（新石器時代）から出土した黒曜石は白頭山産であるとしているがその根拠が希薄のため信憑性に欠けるとした（李鮮馥^{リ ジョンボク}1996）。しかし、韓国出土黒曜石は少なくとも在地石材というより遠隔地石材になることが予想される。その遠隔地の中には九州も含まれているのである。このような黒曜石は後期旧石器時代の最末期に入ると細石器を含んだ石刃技法によく使われるようになるが、そこでも石英脈岩製の礫器は共伴して出土するのである。

おわりに

これまで韓国の旧石器時代遺跡は中部と東南部にしか存在しなかったが、最近では南西部にも知られるようになった。その内容は主に後期旧石器時代の石器が多いが、その石器類は最終氷期における人類の活動を窺わせるよい証拠品である。北朝鮮を含む大陸と現在は海になっている西海（黄海）を生活舞台とした生活が広がっていたのである。そのなかで日本列島とは緊密な関わりを保ちながら各々の地域で生活が営まれた。

【参考文献】

- 金元龍 1992 『韓国考古学概説』
李鮮馥・李ヨニル 1996 「黒曜石石器の理化学的特性に関する予備考察」『韓国考古学報』35
李東瑛 1994 「第四紀地質学と考古学の共同研究」『先史文化』2

50 周年記念シンポジウム 1

村落史研究

—歴史の基層—

村落史シンポジウムの開催にあたって

木 村 礎 (明治大学名誉教授・日本史)

1. 村落史研究の史学史(特に日本史の場合)

日本近代歴史学(戦後の社会構成史学をも含む)への補完的研究として、そしてアンチテーゼとして。

2. 村落史研究の意味

歴史における基層と表層、基層としての村落。

歴史における連続と変化、連続性が強い村落。したがって歴史を、連続を基軸として考察する場合の好個の研究対象(但し、変化を伴わない連続はあり得ないことをも銘記すべし)。

3. 村落史研究の方法

1) 村落とは何か(「村落」についての規定)

イ) 農村の場合=集落+耕地+ α (多様)

ロ) より包括的な規定=居住領域+生産領域+ α (多様)

2) 研究の方法

- ・上記イ) ロ) につき、その個別要素あるいは全体を対象とする(個々の村落を越える広域を対象とする場合もしばしばある)。
- ・研究対象についての「景観」の現状認識と歴史的復原
- ・研究対象における人間の「生活」を明らかにする。

*景観形成は人間の生活上のいとなみだから、大きくいえば「景観」は「生活」の中に入るが、問題に迫るための手法に差があるので、一応分ける。

4. シンポジウムの目ざすもの

- 1) 村落をアジア史的な広い視野で展望する。
- 2) 歴史を基層から照射する。
- 3) 歴史認識の構造を村落史、生活史的に組替える。

日本中世村落の景観と生活

—その研究史的意味と方法論をめぐって—

原 田 信 男 (札幌大学女子短期大学部・日本史)

戦後歴史学において日本の中世村落の研究は、政治史・制度史・社会経済史・社会構成体史といった角度か

ら主に進められた。近年になって漸く、景観や生活といったレベルでの村落の具体的在り方が、次第に注目を集めるようになった。研究対象や内容の時代的変遷には、自ずとそれぞれの時代の社会状況や学問状況が反映しているが、その変化の意味についての議論は極めて希薄なように思われる。

それはおそらく史学史といった分野が、残念ながら有用な研究テーマとして認識されていない点に、まず大きな問題があろう。さらにもう一つの要因としては、研究者もまた時代の雰囲気流されて、社会や学会の主要テーマを扱うことが先端的な研究である、と無自覚に思い込んでいるような風潮が、歴史学会の底流にあるためと考えられる。

最も顕著な事例としては、1970年代から80年代にかけて、“人民闘争史”から“社会史”へのテーマの転換が見られたが、わずかな社会史批判は存在したものの、大した議論もないまま、いつしか“人民闘争史”は下火となった。そうした反省を踏まえ、最近漸く注目を集めつつある景観と生活の問題に関して、そのルーツと研究史的意味を明らかにしておくことは、方法論の模索とともに、景観および生活史の研究にとって必要不可欠な作業ともいえよう。

ここで日本の中世村落を議論の対象とするのは、報告者の専門分野という制約によることを最初にお断りしておきたい。ただ近世以降と異なって、中世においては、相対的に史料残存度の低い時代であるという特徴がある。そうしたなかで敢えて中世を選ぶのは、他分野に比して史料の少ない景観や生活という研究条件を、どう克服するのかという点が興味深いためである。

そこで本題に入る前に、古代に比べ中世では地方分権的な要素が強くなるため、それぞれの地域あるいは支配者によって異なる場合が多く、史料の量は相対的に恵まれているが、代わりに偏在性が著しい、という特色がある。また中世村落と近世村落の立地上の連続性が比較的高いのである。

次に研究史の流れを見れば、何よりも歴史学は左右を問わず、政治的な思想潮流や社会状況の変化に、比較的敏感に反応しやすく、研究者の歴史観においても政治や社会と密接な関係を保たざるを得ない、という宿命にある。戦前・戦後の皇国史観や唯物史観などが、その代表であるが、1940年代末から50年代における“世界史の法則”に象徴される社会構成体史の研究、同じく60年代後半から70年代にかけての“一揆”に代表される人民闘争史の研究、あるいは国家論研究など、政治や社会に関わる大テーマのもとで個別の村落研究が進んだ。

ただ詳細に研究史を検討すれば、この時期に景観・生活に関する研究の萌芽が見られる。すでに60年代に、永原慶二・古島敏雄・木村礎などによる景観を意識した研究が、徐々にではあるが着実に積み重ねられている。また生活史についても70年代には、網野善彦・横井清などが独自の研究視点で、新たな成果を挙げつつあった。もちろん学問レベルで見れば、景観研究は地理学と、生活史研究は民俗学と、それぞれ密接な関係にあった。

しかし両者の歴史研究は、単なる地理学・民俗学の継承・発展ではなかった。あくまでも歴史学の方法論と問題意識に根ざしたもので、そのルーツは歴史学の内部に求められる。それは戦前・戦中においても地道に続けられた実証主義史学で、その延長線上にある戦後歴史学の内省を通じて、景観・生活への視点が芽生えた。もちろん戦後歴史学が、解放された唯物史観の影響を大きく受けたことは事実であるが、一方で実証主義の精神も深く受け継いでおり、おそらくその無意識の内省が、景観・生活研究の端緒となったものと思われる。

歴史学的に見て景観研究は、個別村落の具体性を重要視した点にあり、空間認識という視点や、歴史の重層性を問い直したところに大きな意味があろう。また生活史研究は、日常茶飯事や村人の精神面などの復権を訴え、その歴史的・社会的条件を明らかにする、という視角の設定を重視したところに意義がある。まさしく真の意味での“民衆史の地平”を切り開く研究分野として、今後の進展が図られねばならない。

ところが残念なことに、景観研究も生活史研究も、方法論的に確立された分野とは言い難い状況にある。両者の課題としては、中世村落のしかも景観・生活という史料の少ない分野では、時代を超えた史料の発掘・利用、および既出史料や文学作品などの読み直しなどを、実証の基本に立ち帰った上で検討していく必要がある。さらに景観であれば、現地調査や絵図分析の方法をどのように確立していくのか、また生活であれば絵画史料や民俗事象をどのように文献と整合させていくのか、などが未だ克服すべき課題として残されている。

近世絵図と地域景観

橋 本 直 子 (葛飾区郷土と天文の博物館・日本史)

1. 景観復原と絵図

ある時代の村落の地理的環境をさまざまな史資料から復原する方法を「村落景観復原」という。地理学では「景観論」は早くから確立されたが、歴史学においては第二次世界大戦後新たに認識され、体系化された分野である。景観復原の強力な史料となったのは絵図であった。絵図とは、屋敷地や耕地などが色別に着色されたものをいう。

景観復原はまず古代・中世史で荘園図を用いて 1960 年代に始まった。70 年代には文献史料以外の資料、すなわち綿密な現地調査及び考古学や民俗学の成果を取り入れた村落景観復原が地方史の新たな方法として深められた。80 年代に入ると、近世史で村絵図が村落景観復原の中心となった。同地域の年次の異なる絵図を比較することによって文献史料では知り得ない景観変遷を把握できる。村絵図が多く残された地域は、領主の交代が頻繁か、近世以降開発が進んだ地域、すなわち景観変貌の著しい地域といえる。

2. 村絵図の史料化と現状

村に残された古文書類は、戦後近世農村史の基礎史料として注目を浴び、系統だって整理され活用されてきた。一方同じく残存した村絵図類は長く脇役の座に甘んじてきた。この理由として、絵図は必要な情報だけが描かれる主題図であること、縮尺も正確ではなく大きさも方位もまちまちである点などがあげられる。

現在、絵図の史料化には次の手順が確立された。

- ①原図にトレーシングペーパーをかけて謄写する。彩色のものは原図に近い色で着色する。
- ②謄写した図が大きい場合、加工しやすい大きさに縮小する。
- ③縮小図へさらにトレーシングペーパーをかけて線を引く。
- ④彩色された部分を数種類のスクリーン・トーンに置き換えて図上に張り込む。文字も原図どおりの位置に書き込む（版下完成）。

絵図が大きい場合は、①の行程を写真版にすることで短縮できる。近年はパソコンによる処理も可能になりつつあるが、大きな彩色絵図を縮小トレースしてモノクロの図版にして活用する方法は、これ以降の景観研究の基本作業となった。

近世絵図はいわゆる村絵図と、村を越えた広い地域を描いた絵図（広域絵図）に大別できる。たとえば河川・用水絵図、宿場・街道絵図、鷹場絵図などが広域絵図にあたる。現在景観復原は、村落からより広範な地域へと拡大されている。この例として用水絵図を取り上げる。

3. 地域景観の復原—葛西用水絵図を事例に—

葛西用水は享保4年（1719）年、利根川中流域の本川俣（埼玉県羽生市）から取水し、武蔵国埼玉郡及び葛飾郡の10か領を灌漑する大用水として成立した。これを描いた絵図を「葛西用水絵図」と称する。葛西用水絵図には次の特徴がある。

〔範囲〕北は利根川の取水口を起点とし、西は古利根川・元荒川・綾瀬川、東は島川・権現堂川・江戸川の範囲が描かれた細長い構図をもつ。

〔方位〕凡例や作成者の配置を見ると西を天する横長の構図が多い。村絵図のように東西南北を記した絵図は少ない。

〔凡例〕葛西用水10か領別（幸手・松伏・新方・二郷半・八条・湍江・西葛西・東葛西上之割・同下之割）に色分けされる。10か領に加え、島中河辺・向河辺領が加わるものもある。用・悪水路、溜井のほか、主要街道などが描かれる。

これら葛西用水絵図を比較検討していくと、河川の付替や用水の落口の変化など時系列変化を含めた広範囲での地域景観変化が追える。

4. 今後の展望

村落景観復原は研究方法として確立したが、広域絵図に関しては、個々の絵図の作成目的や年代比定、構図の検討などが課題として残されている。この手がかりとして、絵図の包紙の上書きや識言がある。ある絵図に見える人名は普請役下役や名主であり、名主家が地域の用水管理に深く携わったことが知られる。重要な点は葛西用水絵図のすべてが用水に関わる地域全体を描いていることであろう。葛西用水地域は、幕府領、旗本知行地、藩領などが交錯する地域である。葛西用水絵図からは、支配の枠を越えて用水管理という目的で村々が結合した姿が読み取れる。

今後の景観研究は、単なる景観の復原にとどまらず、絵図の史料批判を前進させるとともに、景観の中に刻印された開発や環境変化の歴史の具体的な検証をめざすべきであろう。

朝鮮における村落研究

寺内 威太郎（明治大学文学部・教授）

朝鮮における本格的な村落調査・研究は、地理学者小田内通敏によって始められた。これは、総督府庶務部調査課が調査事業の一環として、部外の専門家に委嘱して実施したものであった。

その成果は、『朝鮮部落調査予察報告 第一冊』（朝鮮総督府、大正11年）および『朝鮮部落調査報告 第一冊（火田民・往来支那人）』（朝鮮総督府、大正13年）として公刊されたが、総督府の機構改革（大正14年）により調査は中断され、小田内の研究は未完ままで終わった。

この後、朝鮮の村落調査で大きな成果をあげたのが、総督府の嘱託として多くの調査事業に携わった善生永助（ぜんしょうえいすけ、1885～？）である。その成果は、『朝鮮の聚落』前篇・中篇・後篇（朝鮮総督府、1933・1933・1935年）全3冊としてまとめられている。これらは、朝鮮半島全域の村落に関する詳細な調査報告書（とりわけ前篇と後篇は900頁を超える大冊）で、善生がほとんど独力で成し遂げたものであった。

善生が最も力を注いだのは、後篇の「同族部落」の部分である。同族部落とは、同一の祖先から出た同本同姓の氏族が一地域に集住しているものを指し、その存在は古くから注目されてきた。善生は文献調査や実地調査を通じて、同族部落の朝鮮半島内での分布状態、村落の内部構造、村落の形成過程や盛衰などを明らかにした。もちろん、同族部落についてはこれ以前に研究がなかったわけではないが、善

生の詳細な調査は、以後の研究の出発点になったという点で重要な意味を持っている。また、この報告書の特徴の一つは、各種の統計を多用し、村落について数量的な分析を加えていることである。植民地支配のもとでの統計資料である点は留意しなければならないが、1910～1930年代の朝鮮各地の村落の実態を知るうえでの貴重な材料であることは疑いない。

今回のシンポジウムでは、『朝鮮の聚落』の内容を紹介しながら、日本および韓国における村落研究の現状を概括する。また、歴史学の研究に係わる人間として看過できないのは、善生の業績が、朝鮮総督府の植民地政策の一端を担う形で生まれた点である。そこで、善生の調査活動を通じて朝鮮総督府の調査事業についても、満鉄の調査事業と比較しながら、その特色と問題点を考察する。

『中国農村慣行調査』と再調査から見た中国華北農村社会について

内 山 雅 生 (宇都宮大学国際学部教授・東洋史)

まず私の研究方法と利用する資料について簡単に紹介しておく。

私の中国研究における第一の特徴として、研究で取り上げる文献資料についての説明からはじめよう。私が使用してきた主な資料は、戦前戦中期に日本の研究機関であった南満州鉄道株式会社（通称満鉄）の調査部がまとめた資料である。満鉄調査部がまとめた調査資料は膨大な数に上るが、華北農村社会に関しては、主として『中国農村慣行調査』（戦前戦中期には「華北農村慣行調査」と呼ばれた）を取り上げてきた。

さて、『中国農村慣行調査』は、1940年より主要調査村落を、河北省順義県沙井村、欒城県寺北柴村、昌黎県侯家営、良郷県吳店村、山東省歷城県冷水溝荘、恩県後夏寨として、当該農村社会に関するさまざまな調査項目について調査を実施したものである。

その調査方法の特徴は、『台湾旧慣調査』や『満州旧慣調査』などの旧来の調査報告が、吟味した調査結果のみを報告書としてまとめて記載していたのに対して、『中国農村慣行調査』は、調査書と応答者の「質問応答録」のみを記述していたことである。

『中国農村慣行調査』を資料とした私の研究は、拙著『中国華北農村経済研究序説』（金沢大学経済学部研究叢書 1990年）にまとめておいた。

研究の第二の特徴は、1990年代前半期に、文部省科学研究費補助金やトヨタ財団、三菱財団等の研究資金支援を受け、三谷孝一橋大学教授を代表者とする研究チームの一員としてと、魏宏運南開大学歴史系（現在の歴史学院）教授を中心とした中国側スタッフとの共同研究による農村調査に参加し、農民へのインタビューから

得た情報をもとに、農村社会の深部を探ろうとする研究方法である。

インタビューを実施したのは、前述した『中国農村慣行調査』が実施された華北農村であり、特に村の幹部や老人たちのライフヒストリーを集積し、いわば村民にとっては 50 年間の個人史にあたる資料を集め、改めて『中国農村慣行調査』と比較しながら 20 世紀の華北農村社会を再考するというものである。具体的には次のような調査時と調査人数であった。

- ①1990 年 8 月 北京市順義縣城関鎮沙井村(延べ 25 人へのインタビュー)北京市房山区良鄉鎮吳店村 (延べ 25 人)
- ②1991 年 8 月 天津市静海縣府君廟馮家村(延べ 42 人)
- ③1993 年 3 月 馮家村(延べ 53 人) 4 月 山東省平原縣後夏寨村(延べ 86 人)
- ④1994 年 8 月 後夏寨村(57 人) 沙井村(52 人)
- ⑤1994 年 12 月 河北省樂城縣寺北柴村(延べ 34 人)
- ⑥1995 年 2 月 寺北柴村(延べ 38 人)
- ⑦1995 年 9 月 寺北柴村 (含北五里鋪村、延べ 92 人)

さらに筆者は、1999 年 9 月に沙井村・寺北柴村・後夏寨村・馮家村を再訪問した。(3)

この調査で得られたインタビュー等の資料については、三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家』1・2 卷(汲古書院 1999・2000 年)に、さらに調査結果から概観できる華北農村社会については三谷孝・内山雅生・笠原十九司他『村から中国を読む』(青木書店 2000 年)にまとめておいた。

これら再調査と基礎とした私の研究成果の一部は、李恩民・邢麗荃両氏によって中国語訳された拙著『二十世紀華北農村社会経済研究』(中国社会科学出版社 2001 年)にまとめておいた。

私たちが 1990 年代前半期に、かつて満鉄が調査した村で再調査ができるようになったのは、いうまでもなく鄧小平が推進した「改革・開放経済」体制と無関係ではないが、中国近現代史の分野でも従来のように文献資料にのみ依拠するのではなく、また毛沢東の中国に対する思いこみから派生した現代中国に関する幻想を克服し、現地調査による実体験と資料収集を基礎とした研究方法が再評価されたことも大きな要因である。

報告では、民国期の華北農村社会における「会首」「会頭」を中心とする村政システムが、

- ①国共内戦および土地改革を経て、共産党の基層幹部による指導に体制転換する際に、いかなる転換をなしたのか、そして転換した村落社会とはいかなる内実を伴った社会となったのか、
- ②1950 年代後半期、「人民公社」の成立に代表される「農業の集団化」の過程で、上級行政機関から派遣された「工作隊」の指導の下で、基層幹部を中心に村落社会はいかなる対応をしたのか、
- ③近年注目されている「村民自治」とも関連させて、「改革・開放経済」体制下で従来の伝統的社会システム

が、市場経済化という現実の中でいかなる意味を持ちえているのか
等のことについて、不十分ではあるが管見の資料と自らが体験した再調査時に収集した資料に基づいて簡単に
論及を試み、討論のための素材を提供できればと祈念している。

インドの農村と農村研究

古賀正則（前明治大学文学部教授・地理学）

インドでは1991年現在総人口の7割強が農村に住む。全国で約55万の村落があり、一カ村の平均人口は1,100
余だが、地域により大きく異なる。村落は通常ジャーティ毎の集住地区から成る。村落の社会構造を規定する
のは基本的に土地所有にもとづく階層とカースト(ジャーティ)で、その構成はきわめて多様であり、カーストの
ランキングも地域でより異なる。18世紀後半以後、イギリス植民地政府は地税設定の必要から土地の権利関係
を中心に農村の社会組織や慣行などを調査し、各種の報告書を作成した。また19世紀後半以降は人口センサス
と地誌を公刊した。これらは植民地支配前後の時期の農村社会を知る基本的な資料である。1955年はインド農
村研究の分水嶺になったといわれる。デューベやシュリニヴァス、マッキム・マリOTTなどの社会学者、人
類学者らにより宗教、カースト・ヒエラルキー、婚姻などに焦点をおいた実態調査が行われ、支配カースト、
サンスクリット化、西欧化といった概念が提起された。その後、60年代以降主要大学の農業経済研究センター
をはじめ各種の調査研究機関により、経済開発政策と関連した組織的な農村の調査研究が行われてきた。最近
では女性学的視点からの農村調査も行われるなど、農村研究はより多面的になっている。

インド農村社会の研究は、ヘンリー・メインやチャールス・メトカルフが提起したインド農村像、停滞的で
画一的な自給自足的農村共同体、独立した小共和国というモデルを打破してきた過程と見ることも出来る。農
村の自給自足的な経済を支えてきたジャージー・マーニー制＝村落内分業体制は、一カ村の範囲内で完結してい
ないことが明らかにされてきた。旱魃や洪水などの災害や飢饉、19世紀半ば以降の藍や綿花、ジュートなどの
商品作物の導入による商品経済の浸透、交通の発達、カリブ海諸国や南アフリカ、東アフリカなどへの海外移
民、大恐慌による農産物価格の下落などは、インド農村に大きな変動をもたらしてきた。

1947年の分離独立以降は、1940年代末から1960年代にかけての土地改革をはじめ、1950年代以降の社会
開発、国政、州政レベルの普通選挙制導入、1960年代後半以降の「緑の革命」、農業機械化の進展、1990年代
以降のパンチャーヤット・ラージの導入、経済自由化などにより、インド農村は大きな変化を経験し、地域間、
階層間の格差が拡大してきた。

トルコの村落—遊牧民から農民へ—

永田雄三（明治大学文学部教授・東洋史）

トルコは、東北アジアからアフリカサバンナ地帯にいたる、ユーラシア大陸を斜めにたすきをかけたように広がる乾燥地帯に位置している。歴史的に見た場合、トルコ人はモンゴル高原から中央アジアにかけて遊牧騎馬民国家を建設した経験をもつ遊牧民である。西アジアへ移住した遊牧民の末裔である現在のトルコ人は、小アジアに移住したのち、しだいに定住し、農耕民に転じた。ただし、少数ではあるがなお遊牧民は存在する。

中東地域は全体として乾燥地帯に属するが、そこで行われている農業は大きく2つに分けることができる。エジプトとメソポタミア（現在のイラク南部）はナイル川およびチグリス・ユーフラテス川による集約的な灌漑農業が行われている。これに対してトルコ・イラン（地下灌漑カレーズをのぞく）・アフガニスタンは山岳地帯で、天水に頼るきわめて粗放な乾地農法が行われている。

トルコ共和国の国土の90%以上を占める小アジアは、降雨量（最も乾燥した中央部では年間300-350ミリ程度）の少ない自然条件に対応して、小麦と大麦を主体とする農業生産と家畜の放牧による畜産とを経済の基盤とする農牧社会である。したがって、農民の多くは、同時に相当数の家畜（羊、山羊、馬、耕作用の牛）を持っている。そのため、「村落」には集落、耕地、脱穀場のほかに冬と夏の放牧地が存在する。「村落」の多くは遊牧民のグループが時とともに定住する過程で形成されたこともあって、規模は一般に小さい。しかも天水農業であるため、干魃になると、また遊牧民に戻ってしまうなど、村の消長の激しいことが特徴である。オスマン帝国は遊牧的国家の性格をもっており、支配者の関心はもっぱら租税の徴収に向けられ、「村落」は行政の単位として認識されていなかった。農業技術は、歴史を通じてほとんど変化していなかったと思われる。村と都市の格差は大きく、農民は、長い間都市における政治的变化に関心でなかった。トルコの「村落」が最も大きな変化を蒙ったのは、第二次世界大戦後のマーシャル・プランによる経済援助である。以後、近代化農政が展開されるなかで、村社会は大きく変わり、多くの農民が離村して都市へ、さらにドイツなど外国へ出稼ぎに出かけた。

報告では小アジア西部の村を例にとって具体的に話を進める予定である。

出土文字資料研究の現在

データベース化される墨書土器 — シンポジウムへの問題提起

吉 村 武 彦(明治大学教授・日本史)

出土文字資料としては、木簡と墨書土器が双璧である。木簡は、奈良文化財研究所が「木簡データベース」を作成し、インターネットで公開している。墨書土器は各県単位の集成が進んでいるが、全国的集成は行なわれていない。今回、日本学術振興会の科学研究費によって、武蔵国・関東を中心に墨書土器の集成を試みた。完全な全国集成には至らないが、釈文・遺跡名・所在地・出典のデータベース化である。武蔵国の場合は、詳細なカード化を完成させつつある。今後は、こうしたデータを有効利用しつつ、あらためて墨書土器研究の原点にかえることも必要である。

埋もれた出土文字資料の対極には、伝世史料がある。残存した史・資料の偶然性と必然性の問題については、古くから議論がある。今一度、史料(資料)論的視点に立ち返り、みなさんとシンポジウムで墨書土器について考えてみたい。

墨書土器の出現と展開 — 飛鳥・藤原地域の墨書土器を中心に

松 村 恵 司(奈良文化財研究所)

全国各地の遺跡から出土する墨書土器は、文字の普及状況や識字率、律令文書主義の浸透の程度、祭祀や信仰の具体的内容、集落遺跡の内部構成や集落遺跡間相互の有機的関係、また出土遺跡の性格などに関して、重要な手がかりを与えてくれる。

しかしながら墨書の意味や、書き手、墨書土器の使われ方については、まだまだ未解明の部分が大きく、墨書土器の各地への展開過程や、変質過程についても十分に明らかになっているとはいえないのが実状である。

そこで今回の報告では、古代国家の中枢地域である飛鳥・藤原地域における墨書土器のあり方、特に出現期の墨書土器のあり方の検討を通して、墨書土器の性格や墨書行為の本質に迫りたいと考える。土器に墨書をする行為が、飛鳥・藤原地域で、どのように始まり、どのように普及するのか。その具体的な過程を、資料を紹介しながら辿り、それぞれの墨書内容について考察を加え、その展開過程を明らかにしてみたい。

現在、確認している最古の墨書土器は、舒明天皇の田中宮推定地に近接した田中遺跡から出土した七世紀前半の須恵器蓋である。判読不明の習書と、硯に転用した際の墨痕が残る。墨書土器の出現と木簡の普及は、軌を一にした現象のようである。

続く七世紀中頃には、坂田寺跡に良好な資料がある。古墳時代の系譜をひく須恵器の蓋に「卍」「金」の墨書があり、「金」は坂田寺の法号「金剛寺」の省略とみられ、「卍」は古代インドにあつては吉祥の標章とされるが、寺を意味した墨書であろう。坂田寺の墨書土器には、「太」と記した漆書き土器と、尼僧名や「卍」などの記号を

線刻した土器が共伴する。この現象は、東国の古代集落における墨書土器の出現期のあり方と類似し、土器に文字を記し始める当初には、墨書、刻書、漆書きなどが共存し、やがて墨書が主体となる傾向を看取できる。当然ながら土器に文字を墨書する行為の背後には、識字者の存在と墨、硯、筆などの文房具の存在が不可欠である。刻書・漆書きは、文房具普及に至る墨書の代用行為とみるべきで、これらの資料を再評価する必要があることを示している。

七世紀末から八世紀初頭の藤原宮の墨書土器は、律令文書行政導入期の資料として高い価値を有している。墨書土器の出土量は、平城宮と比較すると極端に少なく、特に習書関係の墨書土器の稀少性が目立つが、記載内容には氏族や人名、器に入れる食物名、役所名があり、奈良時代以降の宮都や官衙の墨書土器の存在形態が凝縮されている。

今回の報告では、近年まとまった資料が得られた飛鳥池遺跡の墨書土器（七世紀後半から藤原宮期にかけての資料）の分析を通して、七世紀後半における墨書土器の展開の過程を、さらに具体的に辿ってみることにしたい。

律令官衙と墨書土器 — 平城・長岡京から地方へ

清水 み き (向日市教育委員会)

1. 墨書土器の出現

本報告の目的は、8世紀の宮都出土の墨書土器を中心に、律令国家の成立によって本格的に出現した墨書土器の機能と特徴を検討することにある。

日本列島において、器に文字や記号を染料などで記す最も古い事例は三重県の片部遺跡や大城遺跡など、弥生時代～古墳時代前期の遺跡とされている。しかし、これらの土器と、7世紀代に王権の所在地・飛鳥近辺から初めて出土し、最初の本格的宮都・藤原京においてまとまりをみせる墨書土器群とが、どのようにつながっていくのか、また論証の道筋がないと考える。

2. 宮都の墨書土器

平城京へ遷都後しばらくして墨書土器は爆発的に増加し始める。墨書土器を分類すると、①官司・官職名、②建物・施設名、③身分・地位、④人名、⑤数字、⑥記号、⑦日付、⑧方角、⑨地名、⑩器名、⑪内容物、⑫行事、⑬記録、⑭呪語・吉祥句、⑮習書・落書、⑯絵・文様と、豊かな内容をもつ。

ただし、上記に分類した全ての内容が出現し、質量ともに充実する時期は、大宝律令施行による律令官衙の成立と少しタイムラグがある。宮都の墨書土器は、各官衙付属の厨や「所」などの下級官司と強い関連性をもっている。官衙の下部組織が整備され、活動が活発化するにしたがい取り扱う土器に墨書を施す例も増加したと推定される。

すなわち墨書土器は広い意味で、土器管理のための情報伝達手段として発達したと考えている。

平城京前半の墨書土器には、ある組織集団内で誰が誰に対し何のために情報伝達をするのか、端的に記されている事例が見られる。

そこで以下、順を追って8世紀の代表的宮都である平城京、長岡京の墨書土器の特徴を分析し、その機能を検討する。

a 平城宮の墨書土器

- ・墨書土器の担い手たち
- ・各宮都の官衙比定と変遷

b 平城京の墨書土器

- ・宮外官衙の成立

c 長岡宮・長岡京の墨書土器

- ・宮外官衙の充実
- ・貴族の宅地
- ・離宮
- ・寺院
- ・宮都における“集落的要素”―宿舎町、東西市周辺―

3. 8世紀の地方官衙・寺院・集落出土墨書土器の様相

東国集落出土の墨書土器は、畿内とその周辺地域出土の墨書土器とはきわめて異なった地域的特徴を示す。東国集落の墨書土器について、宮都と比較して考えてみたい。

墨書土器研究の新視点 ― 東国を中心に

荒井秀規（藤沢市教育委員会）

近年、東国を中心にいわゆる墨書土器（及び刻書土器）の資料数が増加し、墨書土器をめぐる研究も盛んである。昨年には、この長年にわたってこの研究分野を開拓・牽引してきた平川南・高島英之両氏の研究が、それぞれ高島英之『古代出土文字資料の研究』（東京堂出版、2000年9月）・平川南『墨書土器の研究』（吉川弘文館、2000年11月）にまとめられ、今日における研究状況も一応の総括がなされた。

報告者も勤務地である藤沢市から南鍛冶山遺跡・上ノ原遺跡を中心に一千点を上まわる墨書土器が出土したことに関連して、両氏をはじめ多くの先行研究を参照に、神奈川県内の墨書土器のデータベースの作成と分析につと

めている。もとより、同様な試みは神奈川県においては「かながわ考古学財団」により詳細に纏められたことがあり、また他県においても各機関において進められている。特に、最近の県史編纂においては、青森・千葉・山梨・岐阜・宮崎県史など、墨書土器の集成が大きな項目の一つとなっている点が、神奈川県史など一昔前の県史編纂と大きな違いであろう。

問題は、それら集成、作成されたデーターから何を読みとるか、である。墨書土器が出土する遺跡個々での墨書土器研究は深化しているが、その一方で、総体としての墨書土器研究、データーから抽出できる事象の普遍化は、膨大なしかも増え続けるデーターを前に、さまざまな切り口が提示されつつも、未だ試行錯誤の段階である。報告者も、優に五千点を上まわる神奈川県内の墨書土器のデーターを前にして、そこから何を見つけるのか、どこに神奈川（相模・南武蔵）の特色があるのか、他地域との相違は如何など、ない知恵を絞っている。

今回の報告では、そうした状況をふまえ、日頃感じていることを挙げていきたい。いわば、現況の墨書土器研究に対する無い物ねだりである。

とにかく墨書土器の出土例は多い。報告書未刊を含めれば、全国で六万は越えていよう。報告で取り上げる視点のうちの幾つかは、日頃墨書土器に接している多くの方の思いと同じなのではなかろうか。このシンポジウムが、広く問題点を確認、共有できる場となれば幸いである。

50 周年記念シンポジウム3

黒耀石と人類史

【開催趣旨】 1949 年の岩宿遺跡調査以来、明治大学は旧石器時代研究を積極的に進め、研究者の育成を含めて学界で高い評価を得てきた。近年長野県鷹山遺跡群という旧石器～縄文時代の黒耀石原産地遺跡の調査を継続的に実施し、さらに文化財分析施設及び学術フロンティア推進事業として黒耀石研究センターも開設して、理化学的分析を含めた総合研究が始まった。学際的研究＜黒耀石と人類史＞は今後明治大学の特色ある研究として推進されるので、本シンポジウムにおいてその道筋を提示する。

(石川日出志)

〔基調報告1〕 黒耀石とは何か—その生成と原産地同定—

杉 原 重 夫 (明治大学文学部教授・地理学)

日本では旧石器～弥生時代に石器石材として黒耀石が多用された。その黒耀石は産出地が限られ、蛍光X線分析法・中性子放射化分析法など各種分析によって産出地が同定できる。

(1) 日本列島における黒耀石は、第三紀・第四紀の火山岩類分布域で岩脈、溶岩ドーム、溶岩流、火砕流として生成される(1次産出地)。また、河床礫、海岸礫、丘陵や段丘堆積物、地表の風化土壌にも含有される(2次産出地)。さらに河川で60km下流のオホーツク海まで運ばれた北海道白滝産黒耀石のような事例もある。これまでの調査によると、これら日本国内の黒耀石産出地(パーライト・松脂岩産出地を含む)は約98地区・275地点に上る。

(2) 明治大学では波長分散型蛍光X線分析装置(リガク製 RIX1000)とエネルギー分散型蛍光X線装置(日本電子製 JSX3201)を用いて黒耀石の非破壊分析を行い、これまで全国約80か所の産出地について総数約1800点のサンプルを測定した。分析は望月(1980)の方法を踏襲して、Rb分率・Sr分率を測定し、その結果、北海道・東北、関東・中部、隠岐・九州の各原産地はこの方法でかなりよく識別できることが明らかとなった。

(3) 霧ヶ峰地区の一角にあたる鷹山地区の黒耀石は、火砕流中にブロック状に混在して噴出したと考えられる。ボーリング調査の結果、北アルプス樺ノ木平を噴出源とする大町APmの直上に火砕流がある事実が確認され、したがってその噴出年代は0.30Ma頃と考えられる。鷹山遺跡で発掘された黒耀石のRb分率・Sr分率はこの火砕流中の黒耀石とほぼ一致する。

(4) 一方、明治大学和泉校地遺跡で出土した試料は、箱根地区産が多く、霧ヶ峰地区産黒耀石は少ないという分析結果を得た。

今後は、各遺跡における原産地別黒耀石の層位的推移、各原産地からの流通経路、供給範囲を解明するために、多くの測定データを蓄積する必要がある。その際、従来各研究者によって測定されてきたデータどうしをどのように比較するかが課題となる。

〔基調報告2〕 黒耀石と考古学—明大考古学と黒耀石研究—

安 蒜 政 雄 (明治大学文学部教授・考古学)

明治大学考古学研究室は、1949年に手掛けた群馬県岩宿遺跡の発掘をはじめとして、日本考古学の諸分野で開拓的な仕事をしてきた。そして昨年からは学術フロンティア推進事業のもと、長野県小県郡長門町に明治大学黒耀石研究センターを建設し、黒耀石をとおして日本列島の人

類史を再構築する目的を掲げた一大プロジェクトに取り組んでいる。

黒耀石の原産地は北海道東部や本州中央部、九州北部などに限られる。一方、旧石器～縄文時代の約3万年間にわたり、日本列島全域でもっとも多用された石器原料であった。その上、日本列島産の黒耀石がシベリアや朝鮮半島にまで運ばれた事実も明らかにされている。

そうした意味で、黒耀石という視点からみる時、広く東アジア全体の中で石器時代のヒトとモノの動きが捉えられてくる。したがって、この石器時代人と黒耀石の動きを明らかにすることができれば、これまでは点的な個々の遺跡と遺物を頼って構成されてきた静止画像的な人類史を、面的にしかも動きのある形で再構成できる。ただし、これを実現するためには、黒耀石原産地に残された人類活動の体系的な研究が必要となる。

明治大学考古学研究室では、1960年代の初頭から北海道と九州の黒耀石原産地遺跡の研究に取り組み、1984年からは長野県鷹山遺跡群に拠点をおく本州中部高地の黒耀石原産地の遺跡研究に着手し現在に至っている。こうした研究の積み重ねは、学界でも高く評価され、黒耀石原産地遺跡を調査し研究する上での一つのモデルとされている。

この研究をさらに推進させるには全国的な組織が必要であり、その具体策としてここ10年来長門町に研究センターをおく構想を持ち続け、昨年ようやく実現した。今後は、黒耀石による日本列島石器時代人類史の再構成という構想のもと、1. 黒耀石採掘鉱山の起源の追求、2. 黒耀石流通のセンターとネットワークの解明、3. 黒耀石考古学の確立、4. 黒耀石研究に関する情報の収集と公開、という4つのサブプロジェクトを組んで具体的研究が実施される。

[基調報告3] 黒耀石原産地遺跡群の保存と活用

大 竹 幸 恵(長野県長門町教育委員会)

信州霧ヶ峰高原の南東端に当たる長門町では、黒耀石原産地の鷹山地区星糞峠において縄文時代の黒耀石鉱山が発見され、国の史跡に指定された。町では、明治大学黒耀石研究センターに隣接して町立展示館の建設計画を進めながら、鷹山遺跡群をはじめとする文化財の保存と活用に取り組んでいる。町立考古・民俗資料館での原始・古代ロマン体験館、鷹山遺跡で子供たちと未来を語る鷹山遺跡教室といった活動を含めて現況と未来を紹介する。